九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

都市計画、不安、人類学(者)：トルコ、イスタンブルの耐震都市計画の事例から

木村, 周平
富士常葉大学

https://doi.org/10.15017/2344482

出版情報：九州人類学会報. 38, pp.47-53, 2011-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

都市計画、不安、人類学（者）
—トルコ、イスタンブルの耐震都市計画の事例から[1)]—

木村　周平（富士常葉大学）

キーワード：不安、都市計画、想像力、不確定性

I. はじめに

土地と法をめぐるコンフリクトは人類学者にとって馴染みの深いテーマである。慣習的な土地所有や継承の仕組みについて、近代的な法規に従う都市計画の実施に伴うコンフリクト、あるいはその両者の交わるところ、例えば先住民による土地返還運動などについて、様々な議論が蓄積されてきた。

こうした研究が注目してきたのは、複数の主体の関わりのなかで、一見するときわめて安定的に見える人々や事物の関係性が揺らぐさまである。例えばクリフォード［2003］は、マシュピーの土地所有に関わる訴訟を追いながら、人類学的な概念を再帰的に問い直す。マシュピーとは誰なのか、それは人類学者にとってだけの問題ではないし、人類学者が解答を決定できる問題でもない。人類学者はその現場を記述するものでありつつ、その一部であることが避けられなくなる。人類学者が頼り、彫琢しようとしてきた諸概念と、人類学者の対象、そして人類学者との関係は、きわめて複雑に入り混じっていく。

長期化する土地と法をめぐるコンフリクトのなかで垣間見える不確定性。不安が現れるのは、この、不確定な未来を臨むプロセスにおいてである。以下、本稿では、トルコ共和国イスタンブル市において進められつつある耐震プロジェクトを事例として、そこに関わり、揺れる人々について記述したい。そこでは不安はいかに構成されており、人類学（者）はそれをどのように捉えればよいのだろうか。

II. 大地から土地へ

まず、本事例における「土地」について述べておきたい。理念的に言って、土地とは、大地を切片化したものであり、歴史的に見れば、このプロセスに関わるのが土地所有の問題である。以下、本稿の議論の対象地イスタンブル市Z区の状況をごく簡単に整理する。

20世紀の前半において、イスタンブルの旧市街のすぐ外側に位置する現在のZ区のあたりは大半がワクフの土地であり、墓地や宗教施設などはあったものの、ほとんど人が住んでいなかったと言われる。しかし1947年にその南端に工場が作られると、トルコ国内外からも仕事を求めて人が集まってきた。彼らは無人の大地を思い思いに塀で囲み、掘っ建て小屋を建て、生活を始めた。職を得ると親族や知人を呼び寄せた。こうして掘っ建て小屋集落は次第に拡大していった。もちろんこれは土地の不法占拠であったが、ワクフの側も彼らを積極的に追い出そうとしなかったので、行政との対立や妥協を繰り返しながら、1980年代までこうした状況が続いた。1980年のクーデタのあと実権を握った政党は、1984年の区政開始と前後して、ワクフの土地を買い、住民に安く売り渡す、ということを始めた。それによって、不法に居住していた住民は、自ら囲い込んでいた土地の所有者となった。土地の権利を得た人々は、施工業者の誘いに乗って、今度は掘っ建て小

屋をアパートに建て替えた。それによってバラバラに住んでいた親族がまとまって暮らすことができるし、場合によっては余った部屋を売って利益を得ることもできるからだ。この結果、土地はさらに分割されることになる。このアパート化のプロセスは 1990 年代前半にかなりの勢いで進行し、掘っ建て小屋はほとんど姿を消した。こうしてZ区の大地は、多くの権利者の所有する土地へと分割されることになった。

しかし、興味深いことに、Z区の大地を切片化したのは所有権だけではなかった。最近10年の間に起きているのは、言わば自然と科学による切片化である。

地震は不意に、また長期的に見れば繰り返し、トルコを襲ってきた。地震は広く言えば、トルコの大地（*anavatan*）が生み出す不安であった。しかし、1999年8月17日にトルコ北西部を震源とする大地震が起き、1万7千人近い死者を出すと、多少様相が変わる。様々な理由からイスタンブルの地震リスクを憂慮したイスタンブル市役所は、2000 年から 2002 年にかけて、JICA とともに市内の耐震リスク調査を行った。これはイスタンブル市の地震のリスクを、建物と地盤という観点から数値化し、行政の最小単位であるマハレごとに明らかにしたものであった。この結果として、色分けされたイスタンブルの地図が公表されたが、その地図が可視化したのは、地震という大地の不安が、土地―切片化された単位としてのマハレ―のリスクとなった、という事態であった。

このように地震が大地の不安から土地のリスクへと切片化され、よりリスクの高い地域が明らかになることで、行政は地震対策を、「合理的に」、その部分に集中して行うことができる。そして、このプロセスを通じて浮かび上がったリスクの高い区のひとつが、Z区であった。従来から、市街地に近いわりに未開発のままの住宅地だと見なされていたZ区に対する行政の介入は、こうして科学的なお墨付きを得たのである。このような背景のもと計画されたのが、耐震化を目的とした大規模な建て替えプロジェクトであった。

Ⅲ．不安：耐震プロジェクト

イスタンブル市役所は、地震リスクが高いとされるZ区をパイロット地区とした地区レベルの建て替えを行う都市再開発のための具体的な計画作成プロジェクトとして「Z区パイロット・プロジェクト」（以下 PP と略す）を開始した。プロジェクトは市役所からその下にある都市計画会社ビナーシュに委託される形で進められた。当初公表された日数は 550 日（2003 年 1 月より 2004 年 9 月まで）であった。市役所の計画では、この PP で再開発の実現の目途をつけ、そのうえで PP に基づいた再開発―つまり土地を収用して、そこにある建物を建て替えること―に着手することが予定されていた。しかし、プロジェクトは予定通りには終わらず、結果的に言えば、2005 年 8 月まで続いた。

本稿は、この長期化するプロジェクトが進行過程においていかなる不安を生み出していたかに焦点を当てる。そこでは誰が不安を抱いており、彼／女の不安はいかに構成されていたのだろうか？

1　事例（1）ゼイネップ —2004 年 5 月

ゼイネップはもうすぐ 30 歳に手が届くという年齢の女性である。彼女はトルコ有数の名門校であるイスタンブル工科大の都市計画学科で学んだ。両親が熱心なムスリムで、大学に通う際もスカーフで髪を隠していた彼女は、在学中に大学でのスカーフ着用が禁止され、卒業に非常に苦労したという。何とか卒業すると、彼女は市役所の交通局で働き始めたが、まもなくトルコを襲った経済危機でリス

トラにあう。そしてその後しばらくの求職期間を経て、このオフィスで働き始めた。

ここで彼女は、Z 区で都市再開発が実施される際に、計画についての情報を住民が共有するための場所となる「ローカル・ビューロー」のモデル作りのチームの一員として働いていた。「ローカル・ビューロー」は現在計画中の都市計画を「住民参加型」で実施するべきだという EU からの要望に応えるために必要なものだと位置づけられていた。

しかし、住民参加の達成はきわめて難しい問題であった。なぜなら現行の法規（*İmar Kanunu*）では、一つの建物の建て替えにはその各部屋の権利者全員の承認が必要だとされていたからである。上述したように権利者が細分化している状況で、一棟ずつ賛同を集めて、地区レベルで建て替えをすることなど到底不可能に思えた。そんななか、彼女たちは上役の意向を気にしながら、どのようにすれば全員に正しく情報を伝え、賛同を得られるかについて、手探りで作業を進めねばならなかった。

オフィスに出入りしていた筆者は、しばしば彼女から愚痴を聞くことになった。彼女のチームのリーダーである日本人プランナーK 氏の指示が理解しにくく、朝令暮改に思えたこと。それも含め、「住民参加」のモデル作りが難航していたこと。そして、このオフィスでどうプロジェクトが進められているかの全体像と、最終的な落としどころが分からなかったこと。これらのことが、彼女に、このプロジェクトにおける彼女自身の位置について確信できないという状況を生んでいた。

実際のところ、このプロジェクトは全体として予定通りに進んでいなかったようである。本来のプロジェクト終了の期日である 2004 年 9 月が近づくにつれ、オフィス内では、様々な動きが現れていた。何人かのスタッフは別のプロジェクトに回され、毎週の定例会議には急にプロジェクト管理のエージェントが現れ、会議を仕切るようになっていたり、大学の研究室のチームや民間会社による売り込みのプレゼンが行われるようになっていた。そのうちに日本人プランナーK 氏も「新しい仕事が見つかった」と言い残してトルコから去ってしまった。さらには、ビナーシュ自体が市側から切られるのではないか、という噂すら、ある程度の信憑性を持って流れるようになった。しかし、ゼイネップは、こうしたインフォーマルな情報を確かめる手段やルートを持ち合わせていなかった。

こうした状況で彼女は解決を模索した。一方で、K 氏の残した資料を整理してプレゼンし、プロジェクト管理チームやビナーシュ上層部と直接話し合いをするなどして、ローカル・ビューローの作業を積極的に継続しようとした。しかし他方で、筆者に対して、外国、できればイランか日本で大学院に入り直して映画について学びたいなど、彼女の状況から考えて夢想的に見える将来計画について語ったり、熱っぽくイスラーム的な生の素晴らしさについて筆者に説いたりするようになった。

2　事例（2）セルダル—2004 年 6 月

セルダル氏はイスタンブル市都市計画課の幹部である。いつも清潔なスーツに身を包み、自信に満ちた礼儀正しさを湛えた男性であった。彼は 30 代半ばと若いながらも、請われて都市計画課長の片腕として働き、郊外の高級団地に妻と一人息子の三人家族で暮らし、毎日車で通勤していた。

彼にとってもやはり、このプロジェクトが予定どおりに進行していないことは不安の種であった。ゼイネップが愚痴を言っていたのと同じ時期、K 氏と筆者と 3 人での昼食の場で「ビナーシュではこの仕事ができないのではないか。このプロジェクトのような大規模な都市再開発は世界に例が少なく、なんとしても成功

させて、イスタンブル、およびトルコだけでなく世界に範を示さなければいけない。それなのに…。ビナーシュが働いていないというわけではないが、機能的ではないのだ。そして結果が出ていない」と彼は言い、ビナーシュを、「彼らは現地を知らない」と切り捨てた。彼と別れた後、K氏は筆者に、このプロジェクトがうまくいっていないために、彼のボスである都市計画課長は市役所内での立場を弱くしているようだ、と語った。

しばらくして、セルダル氏は市役所側としてビナーシュに介入をはじめた。今いるビナーシュのスタッフだけでは対応できない、というのが彼の見方であり、プロジェクト管理エージェントや、大学教授などの専門家をこのプロジェクトに加入させるようとしたのは彼であった。彼にとって、こうした補強が解決への方途に思えたのである。しかしこうした介入は、プロジェクトの実施の仕方を変化させ、結果として問題も変容させてしまう。結局、彼は望むような成功は得られないままであった。

3　事例（3）ハリル—2005年5月

ハリルは40代の、Z区内で看板屋を営む男性である。彼はトルコ北部の黒海地方出身で、ずんぐりとした体つき、赤ら顔で、普段はおとなしいが、話し出すと熱を込めてしゃべる。若いころから左派的な政治活動に積極的に関わってきたようだが、それについては多くを語ろうとしない。

彼は、しばしば耳にする、市が行おうとしている都市計画について、その全貌がつかめないことに不安を抱いていた。まもなく実施されるのではないかとか、すでに立ち退きが始まっている、などの噂も流れてきていた。彼は大学で都市計画を学ぶ娘に頼んで都市計画の業界団体に情報を求めたりしたが、規模や内容（立ち退いた住民はどこに行くのかなど）についても様々な噂があり、どれが正しいのかは判然としなかった。しかし彼は、行政の目的は彼ら自身の利益であり、そのために貧しい住民たちの土地を奪おうとしているのだ、と考え、区内でも知人たちと話し合いの場をもっていた。

そんな折、彼は区役所が主催した、住民とプロジェクト側との対話の場となることが予想された、あるシンポジウムに区内の市民団体の代表の一人として参加することになった[2)]。

しかし、シンポジウム自体は予想外の展開によって失敗に終わってしまった。というのもZ区長は、大学とのトラブルから都市計画課のスタッフが入場を拒否されてしまったことに激怒し、開会してすぐ退席してしまったのである。ハリルはそれでもパネルに残り、自らの主張を述べた。こうした彼にとっての解決を目指したアクションもしかし、都市計画側には届かなかったのである。

以上、プロジェクトの委託者、実施者、そしてそこに巻き込まれるだろう住民、という3者について、PPのある時点に焦点をあてて記述した。もちろん、ここで扱えたのはごく一部にすぎない。しかし少なくともここからは、耐震都市計画の進行が、立ち退きを迫られることになる住民だけでなく、それを実施する側の人々にも不安を生じていた、ということが見えてくる。とはいえ、それぞれにおいてプロジェクトの「何」が不安を導いたか、またそこから見えるプロジェクトはいかなるものであったのかは、相互に関係しつつも、微妙に異なっている。この予定通り進まない計画は、それに関わる多様な立場の人々に対し、集合的に、不安として経験されていたが、それがいかなる不安であり、またそれにどのように反応するかは、多様化・個別化されていたのである［cf. Mol 2002］。別の言い方をすれば、この時点で、このプロジェクトは、社会的実在でありつつも、それが事物のように明確な輪郭や境界線をも

たない不確定性をはらんでいた[3]——この都市計画がいかなるものであり、どのような決着がつくのかは、ウェブサイトや書類の上で、あるいは関係者の言葉の上では明確に示されていたとしても、それはプロジェクトの実態を示しているというよりはむしろ予定や願望に過ぎず、プロジェクトの実状に関しては、実際に進行中の時点では誰も確信をもって語ることはできなかったのである。

そしてそれは筆者も同様であった。筆者がこのプロジェクトに関わりだしたのは 2004 年 5 月のことであった。同年 2 月にイスタンブルに到着し、一年半の予定でフィールドワークを始めた筆者にとって、調査の比較的早い段階でこのプロジェクトで働くK氏と出会ったのは、きわめて幸運なことに思えた。しかし、実際に観察するプロジェクトは、きわめて混沌としていた。様々な人の語りは一貫していなかったし、多くの語りは曖昧で要領を得なかった。当時の日記には、苛立ちと疲れが毎日のように綴られていた。

結局、2004 年 9 月、筆者は意図しない形でこのプロジェクトから距離を取ることになった。その時点で、このプロジェクトが何なのかは結局分からずじまいであり、もしこのプロジェクトが成功にせよ失敗にせよ、決着がついていれば、そしてプロジェクトの全体像を見渡すことができていれば、というのが当時の筆者の思いであった。つまり筆者も、部分的ではあるが、ゼイネップやセルダル氏、ハリルらとプロジェクトの全体的な理解への欲望を共有していたのである。

Ⅳ．法（の不在）

1　決着に向けて

結局予定通りにプロジェクトは終わらなかったが、しかし、実施側は諦めなかった。パイロット・プロジェクトから数年がたってから、状況の打開策として浮上してきたのが、「都市再開発法」を作成し、成立させること、であった。つまり、耐震都市計画に法的な根拠を与え、同時に、住民参加型の都市計画の手続きを法的に確定すれば、それに従ってこのZ区のプロジェクトもスムーズに進められるだろう、ということである。

これは確かによい考えだった。すでに述べたとおり、当時の法規は一つの建物の建て替えにはその各部屋の権利者全員の承認が必要だとしており、権利者が細分化した地区で参加型の都市計画を行う障害となっていた。新たな法が策定されれば、この問題をかなりの部分、解消することができるはずであった。こうして、前章で見た状況の曖昧さや不確定性から生じる不安に対して、「法の不在」という形で状況を確定し、法を成立することが問題を解決する、というようなリフレイミングが推し進められたのである。とはいえ、このようなゴールが設定されても、そこに到達するのはいつになるのかは不透明であった。

2　決着？

2010 年 9 月、Z区を訪れた筆者は愕然とした。工事が始まっていたのである。都市計画予定地だったところは、塀で囲われ、そのなかをブルドーザーやトラックが、大音量を立てながら行きかっていた。すでに基礎部分には鉄骨も張り巡らされていた。大きな建物がそこに現れつつあった。塀には「海岸公園（*Sahil Park*）」という団地の名前が大書された、きれいな完成予想図が掲げられていた。

聞くと、とうとう法改正が行われた、とのことであった。しかし、待たれていた「都市再開発法」が成立したのではなく、市役所に関する法が改正され、自治体にこうした再開発を行う強い権限が与えられた、とのことであった。それによれば、自治体は、ある程度の範囲で耐震性に問題のある建物が集まっている地区に対し、自ら決定し、住民を一時的に立ち退かせながら、建物の取り壊しと建て

直しを行うことができる。こうして、“決着”は誰の予想とも異なる形で訪れたのである。2010 年 10 月 17 日付の *Radikal* 紙によれば、市役所はこうした形の都市再開発を 10 の区で進めている、とのことであった。

こうして、この、都市に居座り続けた都市計画は、グロテスクな――先進的な問題意識と時代錯誤的な手続きの奇妙な組み合わせ――解決策によって、とうとう実現されようとしている。ではこれによって、人々の困惑や不安は解消されたのだろうか？コンフリクトの「転換」ということで言えば、確かに 2004 年から 2005 年にかけて人びとが抱いていた不安は、これによって見えなくなるだろう。しかしこれは解決なのだろうか？

V.（暫定的な）おわりに

以上本稿では、イスタンブル市で進行する耐震都市計画に焦点を当て、ある時点での様々な不安と、またこの計画の、現時点における帰結について記述してきた。

この計画が決着に向かいつつあるように見えることは、調査時点での筆者にとっては、ほっとする事態であったかもしれない。それによって、プロセスを一本の線として捉え、対象となる事態が何であったのかを確定し、それぞれの行為者の行為に解釈を与えることができる。プロジェクトに巻き込まれていた人々は、その出来事における一時のエピソードとして、適切な位置を与えられるだろう。

しかし本稿において、集合的でありつつ個別的な経験でもある不安というものを手掛かりにして考えたかったのは、そうしたものとは別の何かである。ホームにおいてであれフィールドにおいてであれ、明確な解決や決着が見えないなかで、ひとは不安に導かれて、彼／女を取り巻く状況を解釈し、反応する。そうした時、何が問題に含まれ、何が含まれないのか、また誰が当事者であり、そうでないのかという境界線は、不確かなものとなる。

フィールドで展開する事例を現在進行形で捉えるなかで、こうした、事態の不確定性、プロジェクトを取り巻く、変化の潜在的な可能性に再び光を当てること。人類学的な知に賭けられているのは、そこで現れていた、多様な、想像的な関係性を追いかけること、それによって、事態をいかに確定していないものとして語るか、確定していないままで居続けさせるか、ということではないだろうか［cf. FORTUN 2001；木村 予定 b］。現実のなかで生起する事態は、目立たない形で多様な可能性の糸をはらんでいる。しかし多くの場合、そうした糸はほつれたまま、事後的な語りのなかでは切り捨てられてしまう。本稿の主張は、不安に揺れる人びとと時間の流れを共有するような記述を通じて、そうした糸の端を見出し、そこから今ある現実を変えていくためのつながりを編み上げていくことを、人類学のひとつのあり方として位置づけることであった。

ここで大地の不安―イスタンブルを待ちうける地震―に言及するのは唐突だろうか。大地の不安は、ここでの決着、確定が、あくまでもかりそめのものであることを教えてくれる。我々が行うのは、決着を求めることではなく、大地の不安とともに書き続けることである。

註

1) 本稿は第 9 回九州人類学研究会オータム・セミナーでの発表原稿を大幅に短縮したものである。

2) この時の彼のステータスは「マハレ災害ボランティア」のリーダーということであった。なお「マハレ災害ボランティア」というグループに関しては、拙稿［木村 予定 a］を参照。

3) ここで DE LAET と MOL［2000］の概念を

使って「流体」と呼んでもいいだろう。

参照文献

DE LAET, Marianne and Annemarie MOL
2000 The Zimbabwe Bush Pump: Mechanics of a Fluid Technology. In *Social Studies of Science* 30（2）: 225 - 63.

FORTUN, Kim
2001 *Advocacy After Bhopal: Environmentalism, Disaster, New Global Orders*. Chicago : Chicago University Press.

MOL, Annemarie
2002 *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*. Durham : Duke University Press.

木村　周平
2010 「イスタンブル、耐震都市再開発プロジェクトの時間性：都市変容の人類学に向けて」『文化人類学』75（2）：261 - 283。
予定 a「防災の公共性はいかに維持されるか」『アジア経済』。
予定 b「『揺れ』について」『現実批判の人類学』春日直樹（編）、世界思想社。

クリフォード、ジェイムズ
2003 「マシュピーにおけるアイデンティティ」『文化の窮状：20 世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信ら（訳）、pp.349-446、人文書院。

＜新聞＞
Radikal 紙（インターネット版）、2010 年 10 月 17 日、"İstanbul yerinden oynuyor!"（2010 年 11 月 01 日閲覧）。

（2011 年 6 月 7 日　掲載決定）